Osaka University Knowledge Archive

Title	安部公房「赤い繭」再読 ： 《おれ》が歩き続ける理由
Author(s)	桑原, 真臣
Citation	語文. 2002, 79, p. 44-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69013
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

安部公房「赤い繭」再読

――《おれ》が歩き続ける理由――

桑原真臣

はじめに

「赤い繭」は、昭和二十五年十二月、雑誌「人間」[1]に掲載された、四百字詰原稿用紙にして約八枚ほどの短編作品である。翌年の四月には第二回戦後文学賞を受賞し、「近代文學」[2]四月号誌上において近代文学同人の各選考委員から讃辞を浴びた。第二十六回芥川賞を受賞した「壁――S・カルマ氏の犯罪」と並んで安部公房の初期作品を代表する「赤い繭」は、多くの刊行本に再録され、ラジオドラマ[3]や舞台作品にも姿を変えている。しかし、安部公房の他の代表作品に関する先行研究論文を比べてみても、「赤い繭」に関するその数は決して多いとはいえない。森川達也氏[4]は、〈「赤い繭」そのものが持っているイメージの美しさ〉にこの作品の生命を感じとるべきであり、〈そこに含まれている寓意をあれこれとせんさくしても始まらない〉と述べ、浜田雄介氏[5]も〈懲罰だの疎外だのといった観念を通さずに、純粋に男の変形を楽しみ、赤く光る繭の美しさに見惚れることができる〉ような自由な「読み」をすべきである、と述べている。このような〈意味[6]の快楽よりも感覚の快楽に身を委ねるのがいいのかもしれない〉という考えが多少なりとも影響しているためか、これまで十分な研究がなされているとはいい難いのであるが、ここで、先行研究について少し触れておきたい。

早坂智子氏[7]は《おれ》の〈繭〉への変形を〈自己喪失〉に繋がるものであると考え、〈それが家であれ国家であれ、人間が何らかの共同体への帰属あるいは定着によって、安全を保証された平穏な生活を得ることができたとき、その引き換えに人は自己を失うことを余儀なくされる〉と述べている。ウィリアム・カリー氏[8]、松原新一氏[9]、五十嵐亮子氏[10]も同様の見解を示しており、《おれ》と《彼》が同一人物であるという新たな「読み」を提示した早川勝広氏[11]も同様の結論に落ち着いている。この「国家などの共同体に帰属することは自己喪失をもたらす」という見解は先行研究の主流となっている。

奥野健男氏[12]は〈家のない庶民のかなしさを人間が繭になるという極限の変身のかたちで表現した〉と述べているが、花田清輝氏[13]や大里恭三郎氏[14]、田中裕之氏[15]は、《おれ》の〈繭〉化を〈歩き回っていた《おれ》、即ち、行動する主体としての《おれ》の喪失〉であると捉え、〈主体的

な行動をやめ、自分一人の精神世界で充足しようとする〉姿に〈巣ごもり〉の姿勢をみる。[16]

李貞熙氏は〈「家」においてこそ求められる人間関係〉を失い、〈自己であるべき存在の根拠を見失〉った《おれ》は、〈確固とした存在の根拠を求められぬままに、次第に人間から逃避し、やがて人間以外のものとの関係のなかに自己を求めようとする〉と述べ、《おれ》の〈繭〉化は、確固とした存在の根拠を求められない生の境界的状態、あるいは、過渡的状態にとどまることの寓喩として捉えている。[17]

金田静雄氏は、《おれ》の一連の行動に〈生への覚醒〉をみてとり、〈自我形成の成立過程〉を示していると論じており、「赤い繭」をポジティブに捉えている。

他にもいくつかの「赤い繭」に関する印象批評やレポート類があるが、代表的な見解は以上の通りである。しかし、私には新たな「読み」を試みることは、作品の精読を通してまだまだ可能なのではないかと思われる。そこで、本論文では、まず第一に、《おれ》が〈歩きつづけ〉なければならない理由を明らかにした上で、第二として《女》《彼》との関係を考察する。さらに第三としては、《おれ》の〈繭〉化について、そして第四として、これまで論じられることの少なかった最終場面までを射程にいれ、《彼》の息子の玩具箱についてそれぞれ考察し、赤い〈繭〉である《おれ》の存在について論じることにする。

一、《おれ》が〈歩きつづける〉ということ

安部公房は、古林尚氏[19]との対談の中で「赤い繭」について、〈イマジネーションを展開していって、自然にそこに落ち着いたというのは、要するに帰属にたいする反感だろうなあ、結局は。もっとも、ああいうイメージをつくってしまったのには、心のどこかに帰属しなければ異端になるぞという不安もあったのかもしれない。反発と不安と両方なんだろうな。なにしろ、ぼくにはいまでも根強く、共同体そのものから受ける疎外感が存在している〉（傍線・桑原　以下の引用部分も同様）と語っている。つまり、安部公房は「赤い繭」において、〈共同体〉に〈帰属〉する者にあたるのが《女》や《彼》であり、〈疎外〉される者にあたるのが《おれ》である、というのである。このことを念頭におき、次に作品の精読を試みていくことにする。

日が暮れかかる。人はねぐらに急ぐときだが、おれには帰る家がない。おれは家と家との間の狭い割目をゆっくり歩きつづける。街中こんなに沢山の家が並んでいるのに、おれの家が一軒もないのは何故だろう？……と、何万遍かの疑問を、また繰返しながら。

「赤い繭」の冒頭部分である。〈家と家との狭い割目〉とは〈道〉のことであり、〈消えうせもせず、変形もせず、地面に立って動かない家々〉と全く逆の〈どれ一つとして定った顔をもたぬ変りつづける〉性質を帯びている。そこを〈歩きつづける〉《おれ》は、移動性をもった人間であるといえる。〈何万遍かの疑問〉を繰り返していることから、《おれ》は長い間、〈家〉を探し求め、彷徨し続けていることがわかるが、《おれ》には帰るべき〈家〉がないという理由が〈何故〉だかわかっていない。つまり、《おれ》は自分の意志で〈歩きつづけ〉ているというよりも、何ものかによって歩かされ続けている

〈傍点・桑原〉状態であることに留意しておきたい。

電柱にもたれて小便をすると、そこには時折縄の切端なんかが落ちていて、おれは首をくくりたくなった。縄は横目でおれの首をにらみながら、兄弟、休もうよ。まったくおれも休みたい。だが休めないんだ。おれは縄の兄弟じゃなし、それにまだ何故おれの家がないのか納得のゆく理由がつかめないんだ。

夜は毎日やってくる。夜が来れば休まなければならない。休むためには家がいる。そんならおれの家がないわけがないじゃないか。

〈縄〉が《おれ》に〈兄弟〉と呼びかけている。ある共通のものに帰属している中で、親しみを込めて呼ばれるものが〈兄弟〉であるならば、《おれ》は〈縄〉の仲間であり、誰かに利用される「道具」として存在している、ということになろう。しかし、《おれ》は「道具」としての存在のありようを主張する〈縄〉に対して、〈兄弟〉であることを否定している。《おれ》は「道具」のような存在ではない、という認識である。しかし、「二」以降で述べているが、《おれ》は「道具」として存在させられていることは明らかなのである。

ところで、繰り返し使用されている「休む」という語について少々ふれておきたい。〈兄弟、休もうよ。まったくおれも休みたい。だが休めないんだ〉という箇所で使われている「休む」とは、〈おれの首をにらみながら〉とあるので、〈縄〉で〈首をくくり〉、「死ぬ」ことを意味する。そして、〈おれの家がないのか納得のゆく理由〉がつかめたら、「休む」つまり「死ぬ」ことが出来るというようにも読みとれないこともない。《おれ》は、〈家〉を確保する「自由の権利」を手に入れることで、どうにもならない自分の存在を清算することを願っている、ともいえるのではないか、と私には思われる。

〈夜が来れば休まなければならない。休むためには家がいる〉という箇所での「休む」は、文字通り《おれ》が〈家〉を所有し、休息することを意味している。〈何故おれの家がないのか納得のゆく理由がつかめない〉が、〈夜が来れば休まなければならない〉〈傍点・桑原〉ために、《おれ》には必ず〈家〉があるはずだ、という確信を得ると同時に〈家〉に辿り着けないことに対して焦燥感を覚えるのである。

《おれ》は、焦燥感を払いのけるために、自分の帰属する場所がないという状況は〈重大な思いちがい〉であり、〈家〉がないのは〈単に忘れてしまっただけ〉と思い直し、偶然通りかかった一軒の家を自分の〈家〉ではないかと、ドアを叩く。

運よく半開きの窓からのぞいた親切そうな女の笑顔。希望の風が心臓の近くに吹き込み、それでおれの心臓は平たくひろがり旗になってひるがえる。おれも笑って紳士のように会釈した。

「一寸うかがいたいのですが、ここは私の家ではなかったでしょうか?」

女の顔が急にこわばる。「あら、どなたでしょう?」

おれは説明しようとして、はたと行き詰まる。なんと説明すべきかわからなくなる。おれが誰であるのか、そんなことはこの際問題ではないのだということを、彼女にどうやって納得させたらいいだろう?

《おれ》が《女》に〈どなたでしょう?〉と訊ねられても説明することに〈行き詰まる〉のは、《おれ》は「帰属する場所」を確保することのみを問題にしており、その質問に対する回答の必要性を認めていないからである。《おれ》にとっては、〈家〉という「帰属する場所」こそが自分の全てなのであり、《おれ》という存在を証明出来る唯一の手段であるかのように考えているようである。

《おれ》は《女》に詰問する。

「ともかく、こちらが私の家でないとお考えなら、それを証明していただきたいのです。」

「まあ……」と女の顔がおびえる。それがおれの癪にさわる。

「証拠がないなら、私の家だと考えてもいいわけですね。」

「でも、ここは私の家ですわ。」

「それがなんだっていうんです? あなたの家だからって、私の家でないとは限らない。そうでしょう。」

返事の代りに、女の顔が壁に変って、窓をふさいだ。ああ、これが女の笑顔というやつの正体である。誰かのものであるということが、おれのものでない理由だという、訳の分らぬ論理を正体づけるのが、いつもこの変貌である。

〈消えうせもせず、変形もせず、地面に立って動かない家々〉側の代表である《女》の〈変貌〉と〈おびえ〉とは、《女》の共同体への帰属を脅かす異質な《おれ》に対する拒絶反応である。

《おれ》が《女》の言い分を〈訳の分らぬ論理〉として片づけているのは、この時点においては、自分が拒絶されていること自体は理解出来ていても、何故拒絶されるのか、その理由がのみ込めないからである。拒絶される理由が〈分らぬ〉が故に《おれ》はさらに〈歩きつづけ〉なければならない、ということになろう。

《おれ》は、《女》の〈家〉に無理矢理押し入って、居座るようなこともせず、すごすごと引き返していることに留意しつつ、次に《おれ》が公園のベンチで横になろうとする場面を見てみよう。

「こら、起きろ。ここはみんなのもので、誰のものでもない。ましてやおまえのものであろうはずがない。さあ、とっとと歩くんだ。それが嫌なら法律の門から地下室に来てもらおう。それ以外のところで足をとめれば、それがどこであろうとそれだけでおまえは罪を犯したことになるのだ。」

棍棒をもった官憲である《彼》の〈とっとと歩くんだ〉という命令に対して、《おれ》は黙って服従し、〈歩きつづける〉。このことは、明らかに《おれ》は既成秩序に従っていることを示している。

《女》の〈家〉を不法占拠することなく、官憲の《彼》の命令にも逆らわないということは、《おれ》が「法」を遵守していることがわかる。つまり、《おれ》は《女》や《彼》と同じ秩序をもつ「国家」に属していることになろう。ところで、同一のものを「分有する」というかたちで成立する集団のことを「共同体」と呼び得るわけであるが、〈みんなのもの〉である〈公園のベンチ〉を《おれ》が使用することが出来ないということは、《おれ》は《彼》らと同じ「共同体」には帰属していないからではないか、という疑問が生じる。このことについては、次の「二」で述べることにする。

《おれ》は、《女》に拒絶され、《彼》に追いたてられるために、彷徨い〈歩きつづけ〉ることを強いられるのである。

二、〈さまよえるユダヤ人〉の《おれ》

彷徨い続ける《おれ》はふと次のように独白する。

さまよえるユダヤ人とは、すると、おれのことであったのか？

私の管見によれば、〈さまよえるユダヤ人〉に触れている先行論文は、李氏[20]の〈「法」によって疎外されざるをえない〈おれ〉の実存〉を説明するために〈さまよえるユダヤ人〉に言及する論文のみであるが、私は別の視点から〈さまよえるユダヤ人〉を考察してみたいと思う。

安部公房はエッセイ「内なる辺境」[21]において、疎外状況にある〈ユダヤ人〉とは〈移動民族的傾向〉をもつ〈土地に結びつけなかった者〉のことであると同時に、〈正統概念の輪郭をより明瞭に浮び上らせるための、意識的な人工照明として〉持ち出された〈異端概念〉である、と述べている。

言葉を変えれば、「本物の国民」たることが、本来的に不可能な存在だったのだ。むろん「国民」であることは出来る。しかし「本物の国民」にだけはどうしてもなりえない。

（傍点・原文）（「内なる辺境」）

「内なる辺境」の言葉をかりて「赤い繭」を読み直すならば、《おれ》は〈「国民」であることは出来〉ているが、〈「本物の国民」にだけはどうしてもなりえない〉のであり、《おれ》を〈拒んでいる者の正体〉（傍点・原文）である《女》や《彼》に代表される〈正統〉側には帰属することが許されないために、自分の帰属する場所を探し続けざるを得ない人間の姿が描かれている、ということになろう。

ところで、《おれ》が移動性を持ち、〈道〉を〈歩きつづけ〉ている姿に〈異端〉の自覚をみてとったとしても、それは単に《おれ》の〈共同体そのものから受ける疎外感〉に過ぎないのである。《おれ》は既存の「共同体」への帰属を試み、《女》の住む〈家〉を訪れたり、〈みんなのもの〉である〈公園のベンチ〉に横になろうとするが、悉く拒まれてしまうことにより、かえって帰属願望は高まっていく。安部公房は〈帰属[22]しないのは悪いことだということを、国家は絶えず反復するんだ。くどいほど反復してそれを頭にたたき込んで、眠っていても帰属離脱に対する不安を引き起すところまでもっていこうとする〉と語ったことがあるが、この〈帰属離脱に対する不安〉のためである。一方、家々の間を彷徨い続け、帰属を要求し続ける《おれ》を排除、疎外するたびに〈正統〉側である「共同体」の結束力は一層強固なものとなっていくのである。つまり、《女》や《彼》の「国家」に対する帰属意識がより強固となる様に《おれ》は「存在させられた」ということになる。決して、実存的「単独者」のような行為主体に目覚めた人間を意味するわけではないのである。

ここで、「一」で保留しておいた疑問に答える必要があろう。「国家」は、その構成員を〝一〟へと統合・統治するために内部に向かって「純粋性」と「全体性」を叫び、「同一化」「普遍化」することへの努力を惜しまない。その方策の一つとして「国家」は、「異端審[23]

問官」である《彼》を巡回させるのである。《彼》の任務は《おれ》を捕らえることではない。《おれ》を歩き続けさせることによって、「共同体」の「正統性」を強化することなのである。

三、《おれ》の〈繭〉への変形

彷徨い〈歩きつづけ〉ていた《おれ》の身体に、突然異変が起こる。《おれ》の足に〈ねばりけのある絹糸〉が〈まとわりつく〉ので、その〈絹糸〉を引張ると、〈いくらでもずるずるのびてくる〉のであった。《おれ》の〈繭〉化の前兆である。

コトンと靴が、足から離れて地面に落ち、おれは事態を理解した。地軸がゆがんだのではなく、おれの片足が短くなっているのだった。糸をたぐるにつれて、おれの足がどんどん短くなっていた。すり切れたジャケツの肘がほころびるように、おれの足がほぐれているのだった。その糸は糸瓜のせんいのように分解したおれの足であったのだ。

（傍点・原文）

《おれ》の身体は、足の端から次第に〈絹糸〉に〈分解〉され、〈変形〉してしまうわけであるが、ここで注意しておきたいことは、《おれ》は性質や状態が変わり、新たな他のものに「変質」「変化」「変身」したわけではなく、既存の何ものからも切り離されたまま〈絹糸〉に〈分解〉された後、〈繭〉に再構成された、ということである。このことは〈繭〉化以前の、《おれ》が《女》や《彼》の帰属する「共同体」から「疎外」されていた状況と何ら変わってはいないことを表している。〈繭〉化した《おれ》は、決して《女》や《彼》が属している「共同体」に帰属したわけではないのであるから、従来の「国家などの共同体に帰属することは自己喪失をもたらす」という「読み」は、正しいとはいえないであろう。また、この後《おれ》の〈繭〉が《彼》に拾われてしまうために、《おれ》が〈繭〉になることで、ついに自分に帰属することが出来、「単独者」となり得たのである、というような積極的評価をすることは出来ない。このことに関しては、「四」で詳しく述べることにする。

《おれ》が〈絹糸〉に〈変形〉したということは、以前に〈縄〉の〈兄弟〉であることを否定していたにもかかわらず、蚕の〈繭〉を構成する〈絹糸〉と同様に、他者に加工され、使用されてこそ、存在する価値がある、ということである。いいかえれば、どこかの場所に帰属することで「アイデンティティ」を確立しようと考える人間は、「共同体」側に利用されることではじめて存在価値が生じる、ということになろう。

四、《彼》の息子の玩具箱

繭の中で時がとだえた。外は暗くなったが、繭の中はいつまでも夕暮で、内側から照らす夕焼の色に赤く光っていた。この目立つ特徴が、彼の眼にとまらぬはずがなかった。彼は繭になったおれを、汽車の踏切とレールの間で見つけた。最初腹をたてたが、すぐに珍しい拾いものをしたと思いなおして、ポケットに入れた。しばらくその中をごろごろした後で、彼の息子の玩具箱に移された。

《おれ》が《彼》に拾われるこの最終場面は、これまでに十分な考察がなされていない。

森川氏[24]は、この場面は〈蛇足であり、作品全体のイメージを、かえって不鮮明にし、矮小化し、卑小化するもの〉であり、〈作者のねらう寓意がこめられていることは明らかだが、しかしその寓意はいかにも貧しく、かつ常識的である〉と述べている。また、田中氏[25]は、〈繭〉が〈踏切とレールの間〉で拾われた背景に共産党員や国労組員が犯人と目された下山・三鷹・松川事件を想定し、自閉的な《おれ》は、既成秩序に従わない点でコミュニズムと共通しつつも、既成秩序を脅かすほどの力を持ち得ないため、権力に玩具として取りこまれてしまう、と考察している。森川氏が読みとった寓意とはどのようなものか、明らかにされていないが、私は最終場面が〈蛇足〉であるどころか、むしろ重要な場面であると考えており、田中氏の指摘にも頷き難い。そこで、次に私なりの考察を述べていきたいと思う。

《おれ》の〈繭〉化が、〈汽車の踏切とレールの間〉で完了したのか、それとも別の場所において〈繭〉化が完了し、風か何かに運ばれ、〈汽車の踏切とレールの間〉にあるのかは、はっきりしない。いずれにせよ、もし〈繭〉になった《おれ》がこのままの状態で放置されているならば、間もなく列車がこの踏切を通過し《おれ》を轢いてしまい、《おれ》は確実に死んでしまうだろう。しかし、《彼》に拾われてしまうために、「死ぬ」といういわば最後の「自由」さえも《おれ》には許されないのである。

先行研究の中には、《彼》は《おれ》が〈踏切とレールの間〉にあることに〈最初腹をたてた〉という部分から、この《彼》を踏切番などの鉄道関係者とするものがあるが、〈繭〉一個轢いたところで列車の運行には何の差し障りもないであろう。棍棒をもった《彼》と同一人物[26]とみて差し支えないこの《彼》が怒るのは、《彼》が踏切番などの鉄道関係者ではなく、また《おれ》が列車の運行の妨げになるからではない。〈歩きつづけ〉てもらわなければならない《おれ》が列車に轢かれて、この世から消えてしまおうとしていたからに違いない。だが、《おれ》が子供の手頃な〈玩具〉になる〈繭〉に姿を変えていたために〈すぐに珍しい拾いものをした〉と思いなおして、〈ポケットに入れ〉、《彼》の息子へのお土産として、持ち帰るのである。

《おれ》は《彼》に拾われた後、《彼》の息子の〈玩具箱〉に移される場面は次のように捉えることが出来るであろう。

《彼》の息子とは、親である《彼》の考え方、思想を引き継ぐ次世代を担う者であるといえるであろう。我々は、自らの経験から、子供は成長過程において、〈玩具箱〉の中の玩具を使って遊ぶことによって、彼らの世界を想像・創造し、構築してゆくということを知っている。《おれ》の〈繭〉が〈玩具箱〉に移されるということは、当然ながらその子供のために〈玩具〉となることである。《彼》の息子は《おれ》の存在を教科書代わりにして、彼の親たちが掲げる〈正統〉や、それに対する〈異端〉とその扱い方を習得するのである。《おれ》は、真の「単独者」（「異端者」）として自己に帰属し得ない限り、「国家」の〈正統信仰〉（「内なる辺境」）を正当化するためのいい道具として用いられるだけなのである。

私は〈《おれ》[27]は《彼》に拾われることを契機に、既存の《故郷》への帰属を果たした〉と指摘する田中氏の意見には賛同出来ない。

なぜなら、《おれ》は〈既存の《故郷》への帰属〉を果たすことが出来ずに、いつまでも彷徨し続けなければ「存在」することが許されないからである。

〈繭の中で時がとだえ〉、〈繭の中はいつまでも夕暮〉となるが、〈繭〉の外は夜を迎えているので、この夕暮れの色は、〈繭〉の外の影響ではない。〈繭〉は〈内側から照らす夕焼の色に赤く光っていた〉のである。夕暮時、〈歩きつづけ〉てきた《おれ》自身が〈夕焼の色に赤く光〉り、この後も〈正統〉側のために存在し続けることを意味しているのである。

まとめ

《おれ》は《女》や《彼》に〈異端〉扱いされ、既存の「共同体」への帰属を拒まれるために〈歩きつづける〉ことを余儀なくされる。既存の「共同体」に帰属することも出来ず、主体的行為者である「異端者」にもなりきれない《おれ》を彷徨させることで、「共同体」側の「正統性」がより明瞭になり、かつ強固なものに出来る。《おれ》は、自らの意志で〈歩きつづけ〉ていたわけではなく、「共同体」側に帰属する《女》や《彼》に歩かされていたのである。〈疎外〉とは、人間の内面とともに社会の側をも変えていかなければ克服され得ないものである。しかし《おれ》は未来の中に自らを投企することを意識するような「単独者」にはなり得なかったのである。〈繭〉になったところで、以前の《おれ》と少しも変わらず、「実存の生成」――無かったものが現成すること、前のものと異質の自己に転化すること――を成し遂げることは遂にできなかったのである。《おれ》の中身は〈大きな空っぽの繭〉同様であったといえる。

〈繭の中はいつまでも夕暮〉であるとは、《おれ》は、今のおかれている状態のまま彷徨し続けなければ「存在」出来ないことを示している。〈正統〉側に歩かされ続けることで、帰属願望が強まり、そして拠りどころに「アイデンティティ」を求めるという行為が、「共同体」側に利用され続ける。[28]田中氏は、〈繭〉化以前の《おれ》を既成秩序に従わない、主体的に行動する人間であると捉えているが、移動性をもちつつ帰属する場所を探し続けるという、一見主体的とみえる《おれ》の行動は、実は、移動性をもたされつつ（傍点・桑原）という受動的なものであったことは明らかである。

注

（1）昭和二十五年十二月一日、第五巻第十二号、三八～四〇頁に所載されている。目次の表題は「赤い繭」だが、本文は「三つの寓話」という表題で「赤い繭」「洪水」「魔法のチョーク」の三話を収めている。翌年の五月二十八日、安部公房初の作品集『壁』（月曜書房刊）に〈第三部　赤い繭〉の一編として初収された。『壁』は〈第一部　S・カルマ氏の犯罪〉〈第二部　バベルの塔の狸〉〈第三部　赤い繭〉（「赤い繭」「洪水」「魔法のチョーク」「事業」）の三部構成となっている。装幀・勅使河原宏、挿畫・桂川寛。

（2）昭和二十六年四月一日、第六巻第四号、二九～三〇頁に「第二回戦後文學賞發表　安部公房『赤い繭』授賞作品に決定」という記事があり、〈銓衡經緯〉および〈選後所感〉が掲載されている。〈彼はたしかに二十代の一つの方向である〉（野間宏）〈『赤い繭』と『壁』とは安部公房の方法的征驅であつた。觀念とイメージが方法の車輪に乗つて確實に狂いなく、何處までも無限に運動をつゞけることが可能になつた〉（佐々木基一）〈このやうな發想の角度と弛みもない追求力が『壁』に見られるごとき成果を含んで現はれたのは、まさしく戰後文學の收穫である〉（埴谷雄高）。「第二回戰後文學賞」は、一九五〇年度に發表された小説、詩、評論、随筆、その他の文学的作品のうち、〈新しい時代の新しい文學を生み出そうとする意欲のうかがわれる作品を對象として〉、花田清輝、野間宏、椎名麟三、佐々木基一、埴谷雄高の五氏による（小田切秀雄は「昨年か

ら病臥にあるため、今回に限り選衡委員を辞退、一切を他の委員五氏に委任した」、とある）銓衡の結果、〈完全なる意見一致のもとに〉、安部公房の「赤い繭」に決定したと記載されている。

(3) 【ラジオドラマ】昭和三十五年十月二十七日（木）午後九時～十時 NHK―FM実験放送〈音楽のおくりものII〉サブタイトル「ラジオのための作品」出演：男・芥川比呂志、女・山岡久乃、彼・熊倉一雄、東京放送劇団　＊放送台本は見つかっていない。

【舞台】昭和三十五年十二月八日（木）草月会館ホール　草月アート・センター主催の「草月コンテンポラリー・シリーズ6作曲家集団十二月の会〈諸井誠〉」で、「パントマイム・舞踏とオーケストラ・シュプレヒコール・コーラス・モノローグ・電子音響との新しい試みによる舞台のための〈赤い繭〉」として上演された。朗読：水島弘、芥川比呂志

(4) 「〈短篇小説の面白さ〉赤い繭」（「國文學」昭和四十四年六月二十日、第十四巻第八号）

(5) 「〈連載講座　安部公房を読む1〉変形が変革するもの」（「月刊国語教育」平成五年七月二十五日、第十三巻第六号）

(6) 永島貴吉「安部公房『カンガルー・ノート』」（「國文學」平成四年九月十日、第三十七巻第十一号）

(7) 「安部公房論――メタモルフォシスの世界――」（「日本文学ノート」昭和五十七年二月二十日、第十七号）

(8) 安西徹雄訳『疎外の構図――安部公房、ベケット、カフカの小説』（昭和五十年六月二十五日、新潮社）

(9) 「否定の精神――安部公房小論」（『作家の世界　安部公房』昭五十三年十一月十五日、番町書房）

(10) 「初期安部公房研究――寓意空間の創造――」（「東京女子大學　日本文學」昭和六十三年三月十五日、第六十九号）

(11) 「安部公房『赤い繭』を読む」（「国語表現研究」平成四年三月三十一日、第五号）氏は〈おれ〉は昼間は会社員である〈彼〉であり、会社員から父親へと役割交替する狭間である夕暮に、頭をもたげる〈素顔〉の〈おれ〉をなんとか〈なだめる〉ことにより、父親という役割を引き受けて帰宅していくのである、と読み取っている。〈おれ〉という「自己自身・自我」を消滅させることによって、父親（〈彼〉）という「社会的な存在性」を獲得するのである、と述べる。

(12) 「解説　安部公房――その人と作品――」（『世界SF全集二七　安部公房』昭和四十六年五月三十一日、早川書房）

(13) 「解説」（『新鋭文学叢書2　安部公房集』昭和三十五年十二月十五日、筑摩書房）

(14) 「安部公房論――変身の悲喜劇――」（「常葉国文」昭和五十一年七月一日、創刊号）

(15) 「安部公房『赤い繭』論――その意味と位置――」（「近代文学試論」平成元年十二月二十五日、第二十七号）

(16) 「〈おれ〉の〈ユダヤ性〉にみる実存的状況――安部公房『赤い繭』論――」（「稿本近代文学」平成七年十一月十五日、第二十集）

(17) 「光と翳――阿部公房　赤い繭――」（「浜松短期大学研究論集」平成三年十二月二十日、第四三号）＊阿部ママ

(18) 高校教諭である伊藤栄洪氏は「安部公房『赤い繭』をめぐって――生徒たちとの話し合いで――」（「言語と文学」昭和五十六年二月十日、第十三号）において、生徒に読書教材として「赤い繭」を与え、生徒との自由な話し合いを〈レポート〉にまとめている。清水正氏は「『赤い繭』〈安部公房〉を読む」（『カフカの『変身』まで――オイディプス的野望とその挫折――』平成九年七月三十日、D文学研究会）において、「赤い繭」を〈おれ〉のオイディプス的願望とその挫折の言語的表出）であると読む。ただし、〝母胎回帰をめざす〈おれ〉は家と家との間の狭い割れ目（女陰）をさまよい続けるが、母を所有する〈おれ〉の父である〈棍棒をもった彼〉に帰宅を許されない。巨大なペニスである〈おれ〉は繭となることで去勢され、消滅する――〟のような論展開には無理があると感じられてならない。

(19) 安部公房・古林尚「〈戦後派作家対談13　安部公房篇〉共同体幻想を否定する文学」（「図書新聞」昭和四十七年一月一日）

(20) (16)に同じ。李氏は〈流浪せざるをえないという存在状況そのものがまさにユダヤ人の流浪とアナロジーされることで罪なのであ〉り、〈ユダヤ人が神の命ずる罪によって流浪が運命づけられたのに対して、〈おれ〉は〈よそもの〉であるということによって「法」の恫喝を受け、そのために、街に入ることができずに、境界線上をさまよう存在とならざるをえない〉と指摘する。

(21) 「中央公論」昭和四十三年十一月一日、第八十三年第十一号／同年十二月一日、第八十三年第十三号

(22) 〈『箱男』附録〉「書斎にたずねて」（昭和四十八年三月一日、新潮社）

(23) 「異端審問官」という言葉は、エッセイ「サクラは異端審問官の紋章」（「朝日新聞」昭和五十六年十一月二十日）にみえる。

(24) (4)に同じ。
(25) (15)に同じ。
(26) 早川勝広氏は、(5)にあげた論文で〈おれ〉という〈自己自身・自我〉を消滅させることによって、〈父親〉という社会的な存在性(繭という家)を獲得するのであると考察しているので、〈おれ〉と〈彼〉が同一人物であるということになるが、最終場面までを考慮にいれていない論考であると、私には思われる。
(27)(28) (15)に同じ。

○本稿における、「赤い繭」からの引用は、『安部公房全集2』(平成九年九月十日、新潮社)に、その他の作品からの引用は、それぞれの初出紙誌に拠った。

――本学大学院博士後期課程――